

ことりの古民家ごはん  
小さな島のはじっこでお店をはじめました

如月つばさ Tsubasa Kisaragi



アルファポリス文庫

<https://www.alphapolis.co.jp/>

## プロローグ

「できたっ」

折り紙で作ったピンク色のチューリップを、蛍光灯の光にかざした。茎と花の境目には、赤いラッピングリボンを蝶々結びにしたものを受けた。

「可愛い」

嬉しくなつて、絨毯に伸ばした両足をばたつかせる。先に書いておいた手紙と一緒に封筒に入れて部屋を出た。

風呂場の脱衣所には、もう少しで帰つてくる父のために、新しい着替えとバスタオルが用意してあつた。リビングの扉を開けると、私が食べた夕飯と同じハンバーグの匂いがした。帰つてすぐに食べる父の食事が、テーブルの上に並べられている。

「ママ」

ベランダの窓の向こうを見つめたまま、気付いてくれない。立ち尽くした母の虚ろな目は、眼下の夜景ではなく、どこか遠くを見ているようだつた。

「ねえママ」

穿き古した部屋着のズボンを少し引っ張ると、母は驚いた顔で私を見下ろした。

「ごめんね、気が付かなかつた。どうしたの？」

私の目線に合わせるようにしゃがんだ母に、「じゃーん」と背中に隠していた手紙を見せた。

「ママ。お誕生日おめでとう」

「これ……ママにくれるの？」

「そうだよ。お誕生日プレゼントなの」

するとどういうわけか、母の目に涙がじわりと浮かび上がつた。ごめんね、と恥ずかしそうに笑いながらトレーナーの袖口で目元を拭い、赤切れが目立つかさついた指で封筒を開けた。

「上手。このチューリップ可愛い。蝶々結びも自分で作ったの？」

私が力強く頷くと、「とっても綺麗にできる」と何度もやり直して端がほつれた

リボンを指で撫でる。

「えへへ。手紙も見て」

早く、と急かすようにその場で足踏みをした。母は膝にチューリップをのせ、手紙を取り出す。母の瞳が左から右へと行つたり来たりした。頑張って綺麗な字で書いた

「ありがとう。ありがとう、ことり」「ありがとう」と母は「手、見せて」と開いた私の手のひらに自分のそれを重ねた。母の

手は薄くて細長い。

「ことりの手はこんなに小さいのね」

「だつてまだ四歳だもん」「ふふ、そうよね。こんなに小さいのに、ママを笑顔にさせてくれる、優しい手。

負けたような悔しい気分になつて、片方の頬を膨らませた。そんな私を見て、母の

口元が緩む。「ふふ、そうよね。こんなに小さいのに、ママを笑顔にさせてくれる、優しい手。いろんな幸せを作れる手……」「元が緩む。そう言うと、まるで痛みに耐えるかのように眉をひそめる。さつきとは違う、悲しうううん。なんでもないの。ことり、もう一回、ぎゅーしようか」

「うんっ」

飛び込んだ母の胸は、お日さまみたいな匂いがする。

「ことり、大好きよ」

「ことりもだよ」

安心するぬくもりに頬を擦りつけると、玄関の鍵を開ける無機質な音がして、母の心臓の音が大きくなるのがわかつた。

父の影が扉の向こうに近付いてくる。

咄嗟に私から体を離して立ち上がった母の膝から、封筒が滑り落ちた。

## 第一話 ことりと豆苗

「つてなわけだからさ。来月ね、そつち戻るから。予定は一日。よろしくね」

「ただの腰痛でわざわざ来なくともいいのに。仕事だつて辞める必要ないじやない」

「違う違う、その仕事先が三月末で閉店なの。どのみち暇になるから大丈夫」

「あら、そうなの？ せつかくいい職場だったのに……。とりあえず、帰つてくる日は港まで迎えに行くね」

「ちょっと、腰痛持ちが迎えになんて来ないでよ。余計心配になるでしょ。それにもう二十六だよ。アラサーの娘なんだから心配しすぎ」

「……まあ、じゃあ考えとく」

明らかに納得していないのが丸わかりの母の声に笑いを堪えながら電話を切つた。1Kの六畳間に幅を利かせている布団を畳んで部屋の隅に追いやり、代わりに一人用の丸テーブルを慎重に引っ張る。水を張ったプラスチック皿に豆苗の根が浸かっているのだ。昨夜、卵と一緒に炒めて食べたばかり。まだつんと刈り立ての芝生状態だけだ。

豆苗が再生できるということは知つていたが、実際にやつたことはなかつた。スープで八十円で売っていた豆苗。今まで動物はもちろん、植物も含め、命あるものは育てないと決めてきた私が豆苗を育てている。

こんな気が起こるもの、きっとあの男のせい。

肩にかかる黒髪を一つに結び、カーキ色の合皮のトートバッグにスマホを突つ込んだ。白からアイボリーへと変色したスニーカーを履き、ドアチャーンをそつと外す。築四十数年のアパートの、重く軋む扉を押し開けた。

いうのも「一般的には」の話だ。

蝶も小躍りしたくなるような麗らかな陽気も、狭く風通しの悪い弁当屋の厨房にガスコンロが合わさると、あつという間に灼熱地獄となる。一応エアコンは点いているが、全開の店頭から仕切り一つしかないこの厨房はなかなか冷えない。

絶えずカタカタと異音を立てる扇風機のおかげで、ぎりぎり立つていられる状況だ。

「ことり、唐揚げ弁当、二十七個だつて」

「えつ、今から？ あつつ——」

コロッケをフライヤーに入れた拍子に右手の甲に油が跳ね、小さく悲鳴を上げた。咄嗟に水で冷やす。じんじんとした痛みが引くより先に、きつね色に揚がったコロッケを引き上げた。幸い、同僚の水島隼人は気付いていないらしい。窓際の棚に子機を戻し、「三時から花見なんだつて」と弁当を袋に詰めてお客様に手渡した。

隼人がこの店に面接に来たのは二年前。店主自身が高齢で店に立つのも厳しくなり、一日も早く働き手が欲しいということで即日採用した。

男性が大の苦手な私を自己紹介直後から呼び捨てにするし、私が「水島君」と呼ぶのを「きもい」と一蹴した。構わず水島君と呼んでも、そのたびに「隼人」と指摘する強引な人間。それが水島隼人という男だ。

そんな隼人は働き始めたばかりの頃、何もかもがぎこちなかつた。言葉遣いや態度

を無理して矯正<sup>きょうせい</sup>している最中だつたようだ。「つす」と言いかけては、慌てて「です」と言い換える。ときにはお客様相手に苛々<sup>ひどい</sup>している様子も見て取れたが、それでも本人なりに心を落ち着けようとしていた。鼻息荒くゆつくり肩を上下させる姿を何度も見た。

それがいつしか苛々する回数も減つていき、彼の短所を長所が大きく上回る状態となつたのだ。今となつては私より高いコミュニケーション能力を活かして、注文を受けるのはもっぱら隼人。私は常に厨房で調理担当となつてている。

ビジネス街の公園にあるこの店は四十年続く老舗弁当屋だ。開店と閉店のときくらいにしか顔を出さない店主——ミツさん<sup>みつけ</sup>という高齢女性が営む、見た目も古く、お世辞にも綺麗とは言えない店。そんな洒落<sup>しゃれ</sup>つ気もない店に私と同年代、まして年下の店員なんて来ないだろうと踏んでいたのに、隼人は二十三歳だつた。神様はなんて意地悪なんだろう。試練を課す人間を随分と偏らせてはいられないだろうかと腹も立つ。

まあ、そんな関係ももう少しで終わりなのだけれど。

「二十一番さん……秋山さん、どうぞ」

「はいはい、ありがとうね。ことりちゃん、厨房暑いでしょ、大丈夫？」

製薬会社に勤める秋山さんが、カウンター越しに厨房を覗き込んだ。円形の地肌を軽く覆う程度の薄毛頭が、レジ横からひょっこり見える。

「ことりの古民家ごはん

「大丈夫ですよ。ありがとうございます」

まだ少しひりつく手で菜箸を持ち、油の海で泳ぐ大量の唐揚げと対峙する。首に巻いたタオルが噴き出る汗を吸い込む。老体に鞭打つて稼働する扇風機の健気な風も、この気温では温風となつてしまつていた。

客足が落ち着いた頃、「よし」と隼人が手を叩いた。二時だ。サンプルが並ぶ陳列台を白い布で覆い、カウンターに準備中の札を立てる。通常であればこれから一時間の休憩だが、唐揚げ弁当二十七個の注文を前にした私はそういうわけにはいかない。最初の頃は大量注文もあつたが、有名飲食店の進出や、会社での行事ごとを苦手とする世代が増えたのもあって、ここ三年ほどはまとまつた注文はなかつた。

網の上に山積みになつた唐揚げはこんがりきつね色だ。最後のグループをフライヤーからすくい上げた。

冷蔵庫から、きんぴらごぼうとたくあんを取り出す。それから玉子焼き。ポテトサラダの入つたボウルは——ぎりぎり二十七個のお弁当分はあるだろうか。でも午後からの注文を考えると、また仕込んでおかないと。

「あとは詰めるだけだろ？俺がやるよ」

「いや、でも……」

「あ、俺にはできないって思つただろ」

隼人の眉が吊り上がる。疑うような眼差しに睨まれた。

「別に、そういうわけじゃないくて——」

隼人は、ちちつち、と人差し指を顔の前で左右に動かし、ニヤリと口の端に笑みを浮かべた。

「ふふん、ほら見ろ」

エプロンのポケットからメモ帳を出すと、挟んでいたルーズリーフを広げた。

「これ、なんですか？」

開いた紙には、弁当八種類の絵が描かれていた。

不器用な私が密かに羨む、隼人の特技の一つ。きちんと色鉛筆で色まで塗られた弁当の中身には、お惣菜の名前が記されている。その字もまた達筆。金髪で耳に穴が六つも空いている能天気男がこんな字を書くなんて、恐らく世界中、誰も思わないはず。隼人はその紙を厨房の壁に押しピンで留めて、弁当箱を作業台に並べた。

「俺、馬鹿だからさ。効率よく厨房で動けないけど、こうやつてきちんと見れば弁当を詰めるくらいはできるんだぜ」

お客様を取りに来るまで一時間。他の総菜と唐揚げを詰めるだけだ。確かに間に合う。

「本当にお願ひしてもいいんですか」

「お願いって、俺もここの店員だし。水分取って休んでなつて。時間余つたらボテサラ用のじやがいも茹でとくわ」

「じゃあ……すみません。お願ひします。何かあつたら呼んでください」「了解、任せろ。つーかなんで謝てんの」

けらけらと笑うと「じゃ、あとでな」と手を振る。袖を捲り上げ、背を向けて菜箸を手に取つた。メモを凝視しながら弁当を詰める後ろ姿。汗染みが広がるグレーのTシャツの背中の、金色の昇り龍と目が合う。もう少しでこの人ともお別れだ、と胸裏で呟いて階段を上つた。

自信満々な隼人は嘘をつかなかつた。十五分前には詰め終わり、お箸とおしづりも準備し、無事にお客さんに渡すことができた。ポテトサラダ用のじやがいもを茹でてくれていたのもあつて、午後の仕込みも難なく終わり、無事に閉店時間を迎えられたのだった。

隼人が洗つた雑巾を干し、私はレジに鍵をかける。店舗の奥にある住居部分からミツさんが出てきたのは、五時を少し過ぎた頃だ。

「じゃあまた明日。おつかれさま」

店を出た私に、ミツさんが声をかけてきた。

「おつかれさまでした。ありがとうございました」

「こうして話すのも、あと少しだと思うと寂しいねえ。でも仕方ないよね。店も私も、もう年だから。引き際だもんね」

言いながら、ミツさんがシャッターに手を伸ばす。きい、がらがらと甲高い錆びた音がオフィス街に響く。半開きのシャッターの下から「またね」と恵比須顔で会釈すると、一気にシャッターを下ろした。

昭和な装いの寂れた弁当屋を覆い隠すようにそびえるビルの群れから、仕事を終えた人たちが手にしたスマホに視線を落としながら出てくる。まるでどこで曲がるか、どこに信号があるか、見なくともわかつているかのように。視線は変わらず手元にあらのに、交差点の歩道の縁で足を止め、青信号を知らせる音と同時に横断歩道に踏み出す。足早に駅に向かうスーツやオフィスカジュアルの服装の人々が、地下鉄へと続く階段に吸い込まれる、見慣れた風景。

——ミツさんの手は魔法の手だよな。

いつだつたか隼人が言った。

——あの人手から弁当が生まれて、何十年とお客様に愛されてきたんだぜ。確かにそうだ。種類様々な弁当は、数年前に亡くなつた旦那さんが考えたものもあ

るらしい。ミツさんにとっては、夫婦の想い出の詰まつた店なのだろう。

飲食店はいくらでもあるのに、ずっとこの店に通い続ける常連が多い。そして新入社員の若い人まで、この現代的な町には明らかに異質な、古く傾いた弁当屋に足を運ぶのだ。ミツさんの手が魔法の手なのは間違いない。

「そんなふうに生きられたら、人生も充実するのかな」

自分が誰かを幸せにできるなんて、到底思えないけれど。

夕照に染まるビルのガラス窓を見上げる。ここを辞めたらこの景色を見ることもできなくなるのだと思うと、少し寂しい。サドルにまたがり、ペダルに足をかけた。

「あれ？ ちょっと、何してますか」

「掴まえた」

いたずらっぽく笑う隼人に、自転車の後ろの荷台を掴まれていた。こういうノリが本当に苦手だ。とにかく距離が近い。そしてこの派手な外見。こういうタイプはきっと喧嘩つ早く、口が悪くて、すぐに他人を威嚇する。どう見ても私とは生きる世界が違う人だ。怒りのスイッチがどこにあるかわからないのが怖い。出会って三秒で「苦手な人」のカテゴリーに迷いなく割り振られた。まあ、一度も怒られたことはないのだけれど。

「弁当屋、今月で終わりだろ」

「そうですね」

試しにもう一度ペダルを踏み込んでみるが、タイヤはびくともしない。この男、涼しい顔で喋りながらも、荷台を掴む手にしっかりと力を入れているらしい。ため息交じりに汗でべたついたうなじを撫で上げた。結んだ髪も、なんとなく湿っている気がする。

「ごはん行こうよ」

「私はそういうのは……」

「えー、今日だけ。早いけど、お別れ会的な。もしかして嫌？」

「そういうわけじゃないです」

私の顔色を窺うような視線に、慌てて頭を振った。

「大げさなことしなくとも。バイトですし」

「バイトでも社員でも関係ないじゃん。ね。ここ辞めたら一生会えないかもしれないんだよ。寂しくない？」

「一生つて……」

寂しくないと思います——さすがに口には出せず、心で留めたけれど。

どうしてこの人はこんなにも関わろうとしてくるのか。これまでの人生において彼らのようなタイプから声をかけられたことはなかつた。無意識に人の顔色を窺つてしま

う私に友達は一人もいない。自分で言って虚むなしいけれど事実だ。

「ことりはお酒飲める人?」

勝手に話を進める隼人が、「ほらほら」と自転車から降りるように催促する。諦めて降りると、ようやく荷台から手を放してくれた。

私は「いえ」と頭を振った。飲めないわけじゃないがお酒は苦手だ。特に、誰かが飲む隣にはいたくない。お酒を飲んで性格が豹変ひょうへんする人だつたらと考へると怖いのだ。

「お、いいね。俺も。じゃあ駅前のパスタでいい? ほら、新しい店できたじゃん。

昼間はすぐえ行列だけど、この時間は空いてるっぽいんだよね」

この春に新しくできたパスタ屋さんは、店から五軒離れたコンビニの前まで行列ができる人気店だ。昼間の長蛇の列に並べるほど、弁当屋の昼休憩は長くない。どうせ近いからいつでも行けるという安心感も相まって、結局一度も行けずじまいだ。

なぜか「俺が押していくよ」と自転車を押す隼人と、並んで歩いた。きっと私が逃げないようにするためだ。信号待ちをしながら、隼人は出張中の友人から預かっているというメダカの話を始めた。これまで命あるものは育てないと決めてきた私が、豆苗を育ててみようと思ったきっかけがこれだ。日々成長していくメダカたちの姿を事細かに教えてくれるのを聞いているうちに、なんとなく気になり出した。

——朝、起きる楽しみができたんだよね。

そんな一言で、豆苗を育て始めた。

「スマホ鳴つてない?  
鞄の中かな」

横断歩道の中頃で、私のトートバッグから着信音が聞こえた。

「電話じゃない?」

視線がバッグに向けられる。スマホを取り出し、画面に表示された見知らぬ番号を確認したのと同時に音が止まつた。履歴を見ると、仕事中にも少なくとも五回はかかってきていたようだ。

「かけ直さないの?」

横断歩道を渡り切つた所で足を止めた隼人を、ゆっくりと追い抜いた。

「いいの?」

「うん」

スマホをバッグの内ポケットに突っ込み、ファスナーを閉めようとして、指先が滑る。手が震えていた。隼人は「ふうん」とだけ言うと、他愛のない話を再開する。

もうすぐ桜が満開になるね。来週の雨で散らないかな。子供たちの入学式まで残つてるといいな——そんなふうに、自分には関係のないことを本気で願つてているようだつた。動悸どうきを誤魔化すように、ゆっくりと呼吸をして……唇を噛み締める。

「ごめんなさい」

「ん？」

モスグリーンの屋根にレンガ造りのパスタ屋がもうすぐそこに見える。私は隼人が

押す自転車のハンドルを掴んだ。

「やつぱり今日は帰ります」

「ちよ、どうしたんだよ急に——」

自転車を奪い返し、トートバッグをかごに放り込んだ。

「すみません。さようならっ」

思い切りペダルを踏み込む。信号の音、車の音、行きかう人々の声。雜踏に埋もれるように、もう何回目かわからない着信音が、バッグの中で鳴り続けていた。

アパートの玄関で電気を点けると、暗い和室で豆苗が迎えてくれた。部屋の隅にバッグを放り、豆苗の水を替える。視界の端に、放り出したバッグが映り込んで嘆息した。スマホを出し、八件の着信と表示された画面を指でスライドする。登録していない、知らない番号。思い当たるのは一人しかいない。

さつき郵便受けに入っていたチラシを広げた。怒り任せに団子状に丸めたそれは皺しわだらけになっていた。裏面に殴り書きされた言葉。留守だつたことに腹を立てたのだけだらけになっていた。裏面に殴り書きされた言葉。留守だつたことに腹を立てたのだけだ

ろう。感情に任せた字は、誰が書いたものか一目瞭然いちちらくりょうぜんだつた。

どうして電話に出ないんだ。一度話がしたい。

家も、電話番号も知られた。この果てしない執念深さには恐怖を覚える。空っぽの胃袋の底から吐き気がこみ上げた。

これを書いたのは私の父だ。生物学上の父親。私にとつてはそういう存在の人間。離婚して父と母は他人になれても、私と父は他人にはなれない。血の繋がりがあると言わればそれまでだ。でも、できるのであれば、そんな繋がりは永遠に断ち切りたい。気持ちだけで言えば、赤の他人でしかないのだ。

幼いとき——物心つく前がどうだったのかは知る由もない。ただ、一番古い記憶である幼稚園の年中あたりには、すでに恐怖心は芽生えていて、両親が離婚した小学三年生の頃には、私の心は真っ黒に塗りつぶされていた。年齢が上がるにつれ、その感情は恐怖から嫌悪感へと変わっていく。

それはきっと一般的な反抗心がもたらすものではなく、父が私たち——主に母にしてきた精神的暴力を目の当たりにしたせいだ。感情のままに、暴言を吐く。物事が上手くいかないのは母のせい、私のせい。怒り、不満、そういった感情を家庭内にま

き散らし、母を追い詰める。怒声と罵倒。私が怪我をしても、成績が悪くとも、全てが母のせいだった。私が悪いのに、私のせいなのに。母を庇おうとする、お前も里美にそつくりだな、と私もまとめて罵るのだ。

離婚して二十年近く経つ今も私たちを捜している。私の居場所を突き止めた父への嫌悪感が膨れ上がるのがわかる。理由は知らない。何が目的のかも知らないが、知りたくもない。

気持ち悪い。むかつく。

どろりとしたタール状の黒い感情が心に流れ込む。苦しくて、悔しくて。息苦しさを覚えながら、チラシを壁に投げつけてうずくまる。搔き毛り、爪を立てた頭皮に痛みが走る。広げた指には驚掴みにした髪が数本絡まっていた。

翌朝、豆苗にはカビが生えていた。陰鬱な私の暗さが豆苗に悪影響を与えたんじゃないか。一生懸命再生しようとしていた豆苗に、心底申し訳ないと思った。カビの生えた豆苗は、謝りながらゴミ箱に捨ててしまった。

桜はあつという間に満開になり、町中をピンク色に染め上げていた。桜の名所でもある町の北側を通る川沿いは人が列を成し、この時期以外では全く見向きもしない桜の木を晴れやかな顔で見上げていた。

どこか浮かれたような世間を横目に、今日も私は弁当屋へ向かう。三日続いた雨風にも負けず、桜の花は枝にしがみついていた。無残にも散つて赤茶に傷んだ花弁が地面を覆つてはいたものの、新たな蕾が開花の時を待つている。

——このままなら、入学シーズンには桜が残つてゐるかもな。

隼人はやつぱりまだそんなふうに言つていた。正直私はどうでもいいような話に、できるだけ平静を裝つて「そうですね」と答えた。

三月末で閉店する弁当屋。だが、私はその日より一週間早く仕事を辞めることになつた。エプロンを腰に巻いて厨房へ入る。シャッターを開けた隼人が陳列台の布を剥がしているところだつた。

「無理に働くかなくともいいんだよ。引つ越しの準備とかあるんじやないの」

弁当容器を吊り下げ棚に補充しながらミツさんが言う。

「出勤前に宅配で送る荷物は詰めできましたし、不動産屋にも連絡は済ませてあるので。細かい手続きは明日終わらせて、明後日には出られるはずです」

ミツさんは「そう」と心配そうに眉をひそめた。

「ことり」

隼人が「そろそろ」と時計に視線を送る。九時半だ。慌てて仕込みの材料を取りに、

冷蔵庫を開いた。

「ことりちゃん、おつかれさま。はい、最後のお給料。今日までの分ね」  
二階の更衣室で着替えを済ませて階段を下りた私に、ミツさんが茶封筒を差し出した。

「ありがとうございます。このエプロン、今日中に洗って明日返しに来ます」

「ああ、いいのよ。それ貰つとくね。はい、どうも。今までありがとうございます」

しわくちゃのミツさんの恵比須顔を前にしたら急に胸が詰まる。目がしらが熱くなつて、ミツさんの姿がぼやけて映る。その向こうに隼人がいるのが見えた。

泣いや駄目。閉店の日を前にして、私はここを辞めるのだ。それも身勝手な理由で。「いつかはこういう日が来るのはわかつたけど、いざとなると寂しいもんだねえ」

私はもう何も言えなくなつて、ただ「ありがとうございます」と深く頭を下げた。人付き合いが苦手な私を優しく受け入れ、一から料理を教えてくれたミツさん。今年で七十九歳になるはずだ。

「ことりちゃん、元気でね」

「はい。ミツさんも、お元気で」

またミツさんに会いたい。だが多分それはもうできない。父とのことがある以上、

私はここに戻つてくることはない。本当にこれが最後だと思うと鼻の奥がツンとする。決壊しそうな涙を堪えて、ごくりと唾<sup>つば</sup>を呑み込んだ。

ミツさんがシャッターを下ろす間際に見せてくれた笑顔と、無機質なガラス張りのビル群がふいにとても綺麗だと思ったことは、一生忘れないだろう。

それから二日後、私は母が一人で暮らす島へと向かつた。千円で買つた、異常にキヤスターの音がうるさいキヤリーケースを引きながら電車を乗り継ぎ、片道チケットを買つて船に乗り込んだ。陸路がないわけではない。それでも船を選んだのは、陸地から次第に遠のく風景を目に焼き付けておきたかったからだ。

この場所へは帰れない。そう心に刻むように。

揺らぎそうになる感情と決別するに。

私はいつまで父に振り回される人生を送るのだろう——甲板<sup>かんばん</sup>の手すりを強く握つた手のひらに、筋状の赤い痕<sup>あと</sup>が浮かぶ。これからどうしよう。ミツさんの弁当屋とう居場所を失つて、島でどうやつて生きていけばいいのか。

隼人は店を辞めたあと、どうするんだろう。ふとそんな考えが過<sup>よぎ</sup>ったが、そんなのは私には関係のないことだ。

ぼく、と響き渡る汽笛を合図にコバルトブルーの海へと放たれた連絡船が、遠霞<sup>とおほ</sup>に

ほんやりと浮かび上がる対岸へと動き出した。

## 第一話 津久茂島・風の丘地区

### 津久茂島。

本州から橋一本で繋がる小さな島だ。土地面積はおよそ一十五平方キロメートル。人口は五千人弱。年齢層は高齢者が半数を占めている。ここで育つた子供は高校から本州の学校に通うことになる。実際、私も本州の高校で寮に入った。

小学校は島全体で三校。中学は一校しかない。昨今の田舎ブームの波に乗つて移住者は増えているものの、定年後の夫婦や単身者が多く、子供の数は伸び悩んでいるようだ。

甲板の手すりに腕を乗せ、次第に近付いていく港に目を細める。この船の乗客の家族や友人だろう、津久茂港の堤防に、まばらな人影が見える。どの人も名前までは思い出せないのだけど。

私がこの島で暮らしたのは中学の三年間だけだ。両親の離婚後に母子生活支援施設で小学四年生まで暮らし、施設を出てからは大阪で二年。地方移住者支援という制度

で母が介護に従事することを条件に、中学入学と同時に津久茂島へ引っ越した。

母が島の人たちと懸命に親交を深めようとしているのを目の当たりにしても、思春期の私はとてもそんな気になれなかつた。一日のほとんどを家と学校の往復で終えていた私は、島民とは挨拶程度の関係にしかなれないのが現実だ。

浮遊感に呑まれないよう足を踏ん張る。船尾のベンチに座る女性が前のめりになつて、膝の上のリュックに顔を埋めていた。日焼けで真っ黒の若い船員が付き添つている。「あつ、お——」

うつかり「お母さん」と港に手を振りそうになつて、我に返つた。胸の前まで上げた手は、行き場を失くして意味もなく襟元を掴む。

母だ。介護の夜勤中にぎつくり腰になつたと嘆いていた母は、迎えの人たちの輪から少し離れて立つていた。なんとなく猫背になつてているようにも見える。

「おかえり、ことり」

最後に船から降りた私を、亀のような歩速で迎えた。

「ただいま。ねえ、腰痛いんでしょ」

「大丈夫、心配しないで。バスで来たし、痛み止めも飲んでるから平気」

声は電話で聞いていたし、写真もスマホで送つてもらつていたが、実物は写真で見るよりもしつかり老けていた。

津久茂島。

今年で六十五歳になる母のほうれい線を含む皺は、化粧氣のない肌にくつきりと刻まれていて、たれ目はたるんだ皮膚に呑まれていた。乾燥氣味のショートカットの髪は灰色と白が入り交じり、姿はしつかり「おばあちゃん」だ。

白い半袖のシャツワンピースに、茶色いつつかけ。ワンピースのポケットからスマホを取り出した母は、「一時間に一本しかバスがないの。タクシーを呼ばなきやね」と画面をスライドし、タップする。スマホを前後させ、眉間に皺を刻んだ。

「老眼、酷くなつたんじやない」

母は画面を見たまま顔をしかめて苦笑する。

「そうなの。人間つて駄目になるときは早いんだから。丸山タクシートてこの番号よね?」

スマホの画面を見せられて頷くと、母は安心したようにタップして電話をかけた。

タクシーが港についたのは十分後だった。車内に乗り込むやいなや、運転手のおじさんが「森野さん、こんにちは」とルームミラー越しに会釈をし、そのまま視線を左にずらして私を見た。

「娘さん、帰ってきたの。久しぶりだねえ」

まるでよく知った間柄のような口ぶりに、運転手さんと自分がどこで会つたのかを思い出せないまま「お久しぶりです」と返した。助手席に立てられた名札には、わざ

とらしいような黒々とした七三分けヘアのたぬき顔のおじさんの写真。その下には丸山幹夫と記されていたが、やっぱり覚えていない。

港から山沿いに進み、島の中心部でもある津久茂商店街を抜け、私の母校の津久茂中学を横切る。大通りを走り、道路標識が現れた。

直進すると白鷺地区。右に曲がれば風の丘地区だ。

タクシーは右に曲がり、住宅街を抜け、田舎ならではの広すぎる坂道を上り、林道に入る。折り重なる枝葉の向こうに、私が三年間を過ごした集落が見えてきた。

風の丘地区は集落の周りに緩やかな山々が連なり、人々が住む村は窪地になつていて、この林道のある丘から見ると、大きなお椀の中に広大な畑と民家が点在しているよう見える。

さつき標識に見た白鷺地区は水田が広がる、米作りが盛んな集落だ。

この島で一番栄えている商店街と、津久茂港のある陽ノ江地区。

陽ノ江地区の隣にあるのが、津久茂川が流れる星野地区だ。あそこは牛や鶏を育てていて、中学の校外学習でアイスクリーム作りを体験した記憶がある。

そんな津久茂島は車なら一時間程度で一周できてしまう。狭い島での暮らしは人と人の繋がりも密接なのだと、母子生活支援施設で聞かされていた。その頃唯一仲の良かつた子が以前住んでいた場所が、そだつたらしい。本人はそれをネガティブ

なこととしては捉えていない様子だったが、思春期の私はそれが煩わしく感じてしまった。

実際島に来ても、大人どころか同級生とも上手く馴染めなかつた。子供同士で話しているつもりでも、あつという間に大人にまで広がつてしまつ。そんな環境に慣れないと私は、人と必要以上に関わるのを避けてしまつていた。

タクシードの支払いの際に振り返つた丸山さんの顔を正面から確認したが、記憶にはない。毛虫みたいな太い眉毛も、カツラにしか見えない七三分けの丸いたぬき顔も、やはり覚えていなかつた。

そして、自分の家の前に立つても「懐かしい」という感情は抱けなかつた。地方移住者支援で紹介された中古の二階建て一軒家は、あの頃と変わっていない。甲高い音で軋む錆びた門扉も、そこに針金で括り付けただけの赤い郵便受けも、丸い石が玄関まで蛇行する狭い庭も、玄関の寂れた引き戸の音も、どれを聞いてもまるで「他人の家」だ。

普通であれば、こういうときは郷愁きょうしゅうを感じたり、しみじみ思つたりするものだらう。自分自身がいかに無感情にここでの三年間を過ごして、いたかを改めて確認したようで、同時に自分の子供時代が酷く空虚に思えた。

二階にある私の部屋は、中学時代で時が止まつていた。掃除や空気の入れ替えで母

が立ち入つた形跡はあるが、簾筈たんすの上の技術の授業で作った木材加工のオルゴールは、一音も欠けることのないメロディを奏でていたし、修学旅行のお土産で買つた柴犬の博多人形が今もテーブルの上に。ひよこ饅頭まんじゅうの色褪せた上蓋が壁に飾つてあつた。

キヤリーケースを部屋の隅に置いて窓を開けると、部屋を巡つた甘い風が、前髪をかき分けて額を露わにする。風の丘地区を畳う低い山々は、淡い桜色に染まつていた。家の裏側に広がる畑に、もんぺ姿の人の丸い背中からお尻にかけてが見える。作業の合間に背中を反らして伸びをして、また丸くなる。畑の脇には自転車が停めてあるから、向こうの住宅地の人なのだろう。

この家は風の丘地区の入り口に位置し、向かいに大きな日本家屋があるだけだ。そこから畑沿いに進んだ先は住宅が密になつていて、個人経営の雑貨店や商店、地元の人が集まるお好み焼き屋さんもあつたはずだ。

ここがあちらの住宅地の間に延びる長いあぜ道の左手には畑が広がり、右手は桜並木が彩る土手がある。土手の反対側は津久茂川の支流となる穏やかで浅い川が村を縱断している。この地区は土の匂いがとても濃い。畑に実る作物や花、秋にはどつさりと実を付ける柿の木がある、彩り豊かな地域だ。見える景色は十年前となんら変わつていなかつた。

土と、桜と、緑の香り。それらを打ち消すように、カレーの匂いが漂つてきた。一

階に下りると、母が昼間に作ったというカレーを温めていた。流し台と反対側の壁にかけてあるうつすらと埃をかぶつた時計は、五時を示していた。

「私がやるよ。お母さんは座つてて」

「これくらいできるよ」

椅子に座つて鍋をかき混ぜる母からおたまを取り上げ、隣の六畳の居間へ手を引いた。しつかり脂肪を溜めた母の二の腕は、しほみかけた水風船みたいだ。

二人分のカレーをよそい、母に向かいに座つた。

「ねえ、明日どこ行こうか」

「いや、どこ行こうって……」

まるで休みを前にした幼稚園児に訊ねるみたいに、母はスプーン片手にティーブルに身を乗り出す。

「無職だし。お金も節約しなきや」

すくつたカレーに息を吹きかけて、ゆっくりと口に運ぶ。私が好きなとろとろカレーだ。とろとろ、というか最早どろどろカレー。スプーンからぼたつと落ちるくらいが好きなのだ。大きいじやがいもが入ったこのポークカレーが、子供の頃から大好きだつた。

ああ、お母さんのカレーだな、と味わいながら次のひと口をすくう。

「いいじやない、少しくらい。お母さんも働いてるんだから、お金は気にしないで。商店街に新しい喫茶店ができたの。うちの地区の畠中さんのお孫さんがやつてるんだけど。浩二君、覚えてない？ ことりの同級生。クラスも同じだつたんじやないかな」

「へえ……」

畠中、畠中、畠中浩二、と頭の中で唱えてみたけど出てこない。女子の輪にすら入れないで孤立していた私が、男子の名前なんて覚えているはずもないのだが。

「いや、その腰で行けないでしょ。治つてからにしようよ」

どうせその浩二君とやらも覚えてないんだし。と心の中で独り言ちてまたカレーを頬張る。美味しい。カレーは飲み物だなんて言う人がいるけど、私もそうかも。

母はどうしてもどこかへ出かけたいのか、「じやあもう少し近場でお散歩とか」などと食い下がる。「私はここに住むのだから、いつでも行けるでしょ」と説得すると、ようやく諦めてくれた。まるで散歩を断られた犬みたいにしょんぼりとしていて、罪悪感が全くないと言えば嘘になるのだけれど。

そのあと私はカレーをおかわりした。母は一皿目のカレーすら「お腹いっぱい」と言い出したので、それも貰うことになった。結局二皿半食べたことになる。

夜になると、外に出てみようかという気も起きたが、母のあの様子だと「私も行く」とか言い出しそうな気がして、やつぱりやめた。

十年も前で時が止まつたままの自室の窓辺に座る。

お腹はいっぱい。風が気持ち良い。

昼間はあんなにも桜色に染まつていた風景も、今はすっかり夜の闇に沈んでいた。黒い山々の稜線が村を囲み、遠くには民家の明かりが白く灯つている。畑の向こうの山の中腹で、石灯籠が淡い光を漏ませていた。

母と初詣で行った神社だ。こぢんまりとした神社ながらも歴史は古い。神社仏閣に興味がある観光客がぱつぱつと訪れる、マニアックに分類される神社だということを数年前に本屋で手にした日本の隠れ絶景写真集で知つた。実際に絶景だったかどうかは、初詣という夜中にしか行つていない上に、寒すぎて足元しか見ていなかつたからわからない。

今朝まではコンクリートジャングルの町にいて、昨日まではオフィスビルの足元で働いていたのに、今は海に囲まれた小さな島で田舎の夜の景色を眺めている。父のことがなければ、島に戻るつもりはなかつたのに。

部屋の隅にキャリーケースと一緒に放り出していた鞄の中から、スマホの振動音が聞こえた。まさか、と思った嫌な予感は的中した。

父だ――

三十秒ほどで留守電に切り替わるが、そのまま切れた。それでも昨日までの焦燥感

はない。アパートは夜明け前に出てきた。早いうちに家を離れ、適当な店で時間を潰してから津久茂島への船の時間を調整した。引っ越しの荷物は最低限に抑え、梱包が大きくなるものは処分した。不動産屋の退去の立ち会いも、事情を伝えるとスーツではなく普段着で来るような配慮をしてくれる人なのも救われた。これだけ対策をしてきたのだから、見つかる心配もないはずだ。

父は、もぬけの殻になつたアパートを見て愕然としたことだろう。

スマホ、解約しよう。

母と住むのであれば連絡を取る必要もないし、どうせ友人もいない。調べ物がしたければ、陽ノ江地区にある役場に併設された図書館にでも行けばいい。車はなくとも自転車もバスもあるし、どうせ暇で時間はいくらもある。窓を閉め、電気を消した。布団にもぐり、目を閉じる。数日ぶりに、穏やかな気持ちのまま眠りに落ちた。

その夜、夢を見た。あの弁当屋での日々の夢だ。

隼人が注文を受け、私が厨房で調理し、お客様が「ありがとうございます」と弁当を持ち帰る。「ごはん行こうよ」隼人の軽い口調が懐かしい。結局、行けない今まで終わつちやつたけど。

夕景に浮かぶ能天気な笑顔は、オレンジ色の強い西日に包まれて見えなくなつた。

「あつ……」

布団の上で大の字のまま呻く。目覚めは最悪だった。触らなくても背中が湿つているのがわかる。前髪の生え際を指先で擦ると汗がべつとりと付いた。

視線だけで頭側の壁掛け時計を見る。十時五十分。青い遮光カーテンの隙間から漏れる陽の光は、引きこもりのアラサーの眼球には刺激が強すぎて顔をしかめた。

五月に入つてから、島の気温は容赦なく上がり始めた。まだ夏どころか梅雨も前だというのに二十五度を超えていた。

一階に下りると、母は仕事に出たあとだった。冷蔵庫にオムライスが入っています、温めて食べてね。ケチャップは冷蔵庫の扉の右側です——几帳面な小さな字で書かれたメモが、居間のテーブルに残されていた。余白には私が幼少期に好きだったカエルのキャラクターが描いてある。過保護なのは相変わらずだ。こういうのも、私が子供の頃から変わっていない。

あれから母の腰はすっかり良くなり、これまで以上に頑張らなくちゃと昨夜も随分と意気込んでいた。オムライスを食べ、シャワーを浴びてからまた部屋に戻った。こつちに来てからずっとこれの繰り返しだ。満腹の二十六歳女は、畳んで積み上げた布団に上半身を乗せるようにして仰向けに転がつた。これぞ食つちや寝。

開けた窓の向こうの電線に止まつた一羽のカラスが、不思議そうにこちらを見ている。小首を傾げて、カアー。あいつ昼間から何やつてんだ？ とでも言つてゐるのか。カラスはしばらく私を観察してから、ばさばさと黒い翼を羽ばたかせてどこかへ行つてしまつた。

私もあんなふうに自由に生きられたらな。まあ、はたから見れば良い年した無職の人間が実家で暮らしている姿は、自由そのものなのだろうけれど。

その日は午後二時を過ぎると薄雲がかかり始め、気付けば雨が降り出していた。うたた寝する怠惰な私を起こしたのは雨の音ではなく、古臭いチャイムの音だった。  
「あらあ、ことりちゃん？ 引つ越してきたつて聞いてたのに姿を見ないから、どうしたのかと思つてたら」

家の前にいたのは、見事な大仏パーマのおばさんだ。五十代くらいだろうか。傘を持つ手とは反対の右手をぽつこりと出た頬骨に当つて、

「大きくなつて。おばちゃん、覚えてる？ お母さんがツバキさんって呼んでるでしょ」と言う。

「ああ、ツバキ屋さんの」

ようやくこの島に来て初めて人の名前と記憶が一致した。ただ、私の記憶にあるツバキさんは大仏パーマのおばさんではないが。

「そう、ツバキ屋の椿マサエ。もうおばさんになっちゃって。わかななかつたわよねえ」ツバキ屋は向こうの住宅地にある個人商店だ。雑貨や文具などを取り扱っていて、私も学生の頃はノートなどを買いに行つたことがある。大らかで声が大きい人というのが印象に残つていて、今はその「大きい」に体のサイズも加わつていて、

「ちょうど前を通つたらベランダに洗濯物が出てたから。声かけなきやと思つて」「ありがとうございます。取り込んでおきます」

母が仕事前に干したものを持ち帰つた私は、また暇になつて部屋に戻つた。

囁くような雨音が聴覚を満たす。流れ込む生ぬるい風は、湿気と緑の匂いが入り混じつていた。

五時を告げる音楽が、灰色の霧に包まれた村に静かに響き渡る。洗濯物を取り込む以外何もしていない私の腹の虫は、完全に息を潜めていた。

三月までは、毎日が本当に忙しかつたな。

考えれば考えるほど、心まで今日の空みたいな灰色の雲に覆われて、ため息が出る。天井の木目が私を見下ろしていた。生産性もないこの時間も嫌いじゃないが、毎日続くと焦りが生まれる。母以外、会話する相手もない。寝て、起きて、食べて、また寝る。そんな毎日だ。

「ミツさん、元気にしてるかな」

私のことも少しずつ忘れてしまうのだろうか。私は忘れないけれど、相手もそうだとは限らない。母と離れて暮らす私にとってミツさんは本当のおばあちゃんみたいな存在で、休憩時間にミツさんとお茶を飲むひとときは、家族のぬくもりのようなものを感じた。そんな大切な場所を失くしてしまつた。店を閉めても、父のことさえなければ会うことはできたはずだ。でも父のことがある以上、ミツさんの傍にいれば迷惑をかけてしまう。

両親が離婚してこんなにも年月が経つていてもかかわらず、私は父に振り回されてばかりだ。なんか悔しい。

よいしょ、と心なしか重くなつた体を起こし、勉強机の引き出しを開けた。中学のとき、一目惚れで買ったレターセットを机に置いて、椅子の座面を下げる。ミツさんに手紙を書き、烟沿いに佇むポストに投函した。返事が来たのは一週間を過ぎた頃だ。

ことりちゃん、元気そうで安心しました。私も元気だけど、閉店した弁当屋の片付けのときに転んでしまつてね。それからは隼人君がよく様子を見に来てくれるの。

ことりちゃんの新しい暮らしはどうですか？ 確か、津久茂島だったよね。

いつだつたかテレビで特集していたのを見て、素敵な所だと思ったのを覚えてい

読みながら「へえ、隼人が」と呟いた。今までの恩があるとはいえ、辞めた職場の雇い主を気遣つて見に行くなんて、誰でもできることじゃない。ノリが軽くて能天気な彼なりに、いい所もある。もちろん一緒に働いた二年間でわかつてはいたことなのだけど。ちょっと微笑ましいような気持ちになりながら、便箋を出してペンを取った。良かつたですね、安心しました。津久茂島はとても静かでいい所です——。ミツさんがそれ以上手紙を書かなくて済むような文面で送った。それでとりあえず終わるつもりだったのに、それから二週間近く経つて、また手紙が届いた。

急に「ごめん。ミツさんに住所教えてもらつたんだ。  
ことりの親父だつて人が店に来たよ。もう辞めたから知らないって言つておいたけど、結構しつこく居場所を聞かれた。大丈夫か?」

達筆な文字で書かれた手紙の文末には、水島隼人と記されていた。

### 第三話 梅雨の紫蘇ジュース

津久茂島での暮らしは、相変わらず退屈な毎日だ。隼人からの手紙に返事を出してから数日。父に店を辞めたことを伝えてくれてありがとうございます。迷惑をかけてごめんなさい。もう店には来ないと思います。こちらは大丈夫です。そう返事を書いてからは音沙汰がない。

父のことを考えていても気が減入るばかりなので、陽ノ江地区の商店街に行くことにした。母が言つていた、私の同級生の喫茶店を店の前から覗いてみた。店内には入る勇気がないが、店主の浩二君らしき姿は見ることができた。

浅黒い肌に、手足も顔も私よりずっと細く、身長は百六十数センチだろうか。黒縁眼鏡に团子鼻の、清潔感のある純朴そうな青年だ。ブラウンのシャツに黒いエプロンの落ち着いた立ち姿と振る舞いが、イギリスビンテージな店の雰囲気と馴染んで、彼がいるだけで絵になる。

浩二君が喫む喫茶クラウンを覗いた帰りに役場の図書館に立ち寄り、新刊コーナーを右から左へとじっくり見て回つた。その中で一冊、『小さなカフェの作り方』とい

う水色のパステルカラーの表紙が目を惹いた。その日はカフェの作り方の本と小説三冊、なんとなく手に取ったガーデニング番組で有名な人の庭作りの本を借りることにした。

時間を持て余す私は一週間かけて三冊の小説を読み切り、庭作りの本を斜め読みしてなんとなく「丁寧な暮らし」気分を味わうだけ味わって、返す本の山に積んだのが今朝。

雨続きでさっぱりしたものが食べたいと言った夜勤明けの母と、冷やしうどんに総菜屋のとり天をのせて朝昼兼用ごはんを済ませた。

#### 「小さなカフェの作り方」

表紙のタイトルを読み上げて、窓辺の砂壁にもたれた。今朝までしつこく降り続いた小雨もようやく止み、雲の切れ間から水色の空が見える。地上に差す細い陽の光が空気中の水分を含んで、光の粒子を抱いていた。

梅雨空の合間から見える水色と同じ色の表紙には、シンプルで飾り気のない白壁の前に満面の笑みで寄り添う女性が二人。年齢的には私とそう変わらないんじゃないだろうか。表紙の二人を探して、ぱらぱらとページを捲る。

#### 「姉妹、か」

元々は姉がパン職人をしていて、妹は趣味の洋菓子作りを活かし、一緒にカフェを

開いたというものだつた。二人の苦労や経験、失敗から学んだことなどが時系列で整理して記されている。それらの文字に視線を滑らせただけで、本を閉じてしまった。仲のいい姉妹。好きなことを極めるために専門学校に通わせてくれた両親。工務店を営む父の手助けもあり、居抜き物件の改装も上手くいったというのを見て、私には縁のない世界なんだ、とそれ以上読む気になれなかつた。

何を期待してこの本を手に取つたのだろう。自分にはないものに恵まれた人。彼女たちのように、ミツさんのように、店を持つことへの憧れでもあつたのだろうか。それからは、ぼうつと流れの速い雲を眺め、雨上がりの青臭い風を感じながら、いつの間にか眠つていた。

何もないでいるというのは、時間の流れが早い。ミツさんの弁当屋で働いていた頃は毎日忙しくしている方が時が経つのが早くて、休日の方がゆっくりな気がしていながら、必ずしもそうではないらしい。家に引きこもり、最低限の家事をする以外は寝て過ごしていると、一日があつという間に過ぎるようになつた。

体が重い。頭が重い。ついでに、まぶたも重い。次に寝たらこのまま一生目が覚めないんじやないかと思うくらい、馬鹿みたいに寝ていた。

そうしているうちに、図書館から借りていた本の返却日になつていた。通常の貸出

期間は一週間。返却日前日から雨が続き、一週間延長してもらっていたが、今日がその返却日だということに、六月のカレンダーに書き込んだ丸印で気が付いた。

「あー、梅雨はもういいよお」

「はじめ、むしむし。ようやく雨が止んで喜んだのに、梅雨の湿気がじつとりと肌にまとわりつく。手櫛を通した髪の毛までもごわついているのがわかる。

家を出てすぐの循環バスの停留所に貼られた時刻表に、今時間——午後一時の場所を見つけて人差し指を当てた。バスが来るまで、あと十五分。

やつぱり体が重い。急激に太ったわけでもない。具合が悪いわけでもないが、とにかく体が重くて怠い。母と暮らす私の食事の栄養面は問題ないはずだが、母以外の誰とも話さない、時間にも縛られない生活というのは、生きていく上で大切な何かを確実に蝕んでいるような気がする。

スマホを解約し、父から追われることもないのだから自由に暮らしているはずなのに、ふととてつもない孤独感や疎外感に苛まれるのはどうしてだろう。寝すぎて凝り固まつた首筋から肩をほぐすように腕を回し、伸びをし、空虚なため息を宙に吐いた。

あぜ道の途中にぽつんと立つバス停は、時刻表が傾き、太陽を遮る待合所もない。中学のときからある錆びついた青いベンチに腰掛け、湿ったシャツの襟を摘まんではためかせた。

山の麓まで広がる畑から、太陽を透かす薄雲のかかった空へと視線を滑らせ、水筒の麦茶を喉に流し込む。十分ほどそうしていると、住宅地の方から白髪の男性が広い歩幅で向かってくるのが見えた。男性は片手を挙げ、「おーい、こんにちは」と声を張り上げた。

チヨコレート並みに焼けた肌は陽光を反射して鈍く光っていた。髪の色と目じりの皺の深さから見ると七十歳は超えていそうだが、タンクトップと短パンから覗く筋肉質な手足は四十代くらいにも見える。ずつしりと重そうなえんじ色のリュックを膝にのせ、私の隣に腰を下ろした。

「久しぶりやな、ことりちゃんやろ」

焼けた顔に白い歯がにっこり広がる。

「えっと、はい。そうですけど……」

「帰ってきたとは聞いてたけど姿を見んから、ほんまかいなと思つたわ。へえ、大きくなつて。べっぴんさんに磨きがかかつたんとちやうか」

あつはつは、と笑う男性は、私の表情を見て「おつちゃんのこと覚えてへんのか」とさらに笑う。あまりにも大きな笑い声に、地面に降りたスズメが驚いたように飛び立つた。

「畠中のおつちゃんやないか。ようお母ちゃんのところに紫蘇持つていつたやろ。ほ

ら、うちの裏で紫蘇畑やりよるやん。神社の近くの  
「赤紫蘇の——」

私の言葉にかぶせて、畠中さんが「せや」と満足そうに頷く。

「明日の朝、また赤紫蘇持つて行くわな。紫蘇ジュース好きなんやろ。昔、お母ちゃんが娘が好きなんやつて言うとつたわ」

この時期になると母が紫蘇ジュースを作ってくれていたのを思い出す。学校から帰つて母が用意してくれた、水をたっぷり浮かべたルビー色の紫蘇ジュース。甘酸っぱくて、炭酸を入れると爽快感がプラスされる。梅雨時期の密かな楽しみだった。

「おっちゃんの孫の店行つてくれたか? クラウンつちゅー喫茶店なんやけど。ええセンスしとるんやで」

「実はまだ……。でもお店の前は通りました。平日なのにお客さんが結構入つていて、素敵な雰囲気でした」

「せやろ。ここらは年寄りばかりで、土日も平日もないからな。一時はどうなるや思たけど、最近は浩二の愛想も良くなつて——お、バス来たで。おう、みんな揃つとんなあ」

運賃箱に百円を入れ、畠中さんは後部座席の顔馴染みらしい人たちの輪に加わつた。私は運転席に近い椅子に腰を下ろし、楽しそうな声を聞きながら、後方へと流れる正面玄関の自動扉をくぐつた。

カウンターで本を返却し、一時間ほど館内を見て回つてから、手ぶらで図書館を出た。  
「こんにちはー」

声をかけられ、愛想笑いを浮かべながら会釈を返す。役場の玄関横の店舗に、営業中の看板が立てられていた。

洋食 黒猫

挨拶をしてきた灰色の短い髪に三角巾を結んだ小太りの女性が、もう一度私に微笑みながら会釈をして店に入った。

役場と同じクリーム色の壁は所々に染みがある。使い込まれたキッチン、日焼けしていくすんだグリーンのテーブルクロスがかけられた六卓の丸テーブル。メニューが書かれた黒板が壁に貼り付けてあるだけの、シンプルな内装だ。玄関横のモンステラが艶々な緑を添えている。

店主と思しき小柄な白髪の男性がキッチンから出てきた。壁のメニュー ボードのすれを人差し指で調整し、真正面、真横から確認し、満足したようにキッチンに引っ込

「あ——  
んだ。

メニューボードの三つ目に書かれたハンバーグ定食に見覚えがある。島に引っ越ししてすぐ、諸々の手続きを済ませた母に連れてこられた店だ。中学生にもなった私は、母との暮らしにお金の余裕がないことはわかつっていたので、一番安いチキンライスを注文しようとした。だが、母は引っ越し祝いだからとハンバーグを頼んでくれたのだ。

運ばれてきた料理には、チーズがおまけされていた。糸を引くところとしたチーズと柔らかい煮込みハンバーグ。夢中で食べる私を幸せそうに見る母の顔と、テーブルに落ちる白い陽だまりの記憶が、確かな温度をもつて蘇る。

「いらっしゃい」

さつきの女性が店主とお揃いの黒いエプロンの紐を結びながらやつてきた。  
「ハンバーグ定食をお願いします」

注文を受けた女性がキッチンに入ると、店主の男性が調理を始める音が聞こえて、やがてデミグラスソースのいい香りが店内を満たしていく。

あの日と同じ、チーズがおまけされた煮込みハンバーグと、滑らかな舌触りのボテトサラダ。野菜たっぷりのスープも絶品だ。BGMもない、客は私だけの静かな店内と美味しい料理。洗練されたお洒落な店にはほど遠い、言葉は悪いがどこにでもある

ような店。だが、そこで出される料理は他では味わえない、ここだけのものだ。干からびた魚の如く気力を失いつつあつた心に、そつと優しい刺激を与えてくれる味だった。

定食の値段は六百五十円。そんな値段で採算が取れるのだろうか。今度はお母さんも一緒に——と思つたら、会計の際に「実は今日が最後の営業日なんですよ」と女性が申し訳なさそうに言つた。

「夫婦で新婚当初からやつてきたんですけど。せつかく来ててくれたのに、閉店の話なんてね……ごめんなさいね」

お釣りを受け取る私に女性は「でもね」と続けた。

「ここ、七月からイベントスペースになるんですけど。地元のお野菜を売つたり、手芸教室だつたり、いろんな催し物ができるようになるみたい。それはそれで楽しみよねつて主人と話してゐるんです。古いものがなくなつても、また新しいものが生まれる。寂しいけれど、新たな人の縁が生まれるなら、それも素敵なんじやないかって思うんですよ」

主人、と呼ばれた店主が、キッチンから顔を出して会釈した。

女性の言う通り、役場の玄関にある掲示板には「洋食黒猫、六月閉店。七月より、イベントスペースとなります」と書かれた小さな紙が貼られてあつた。

「ねえ、これ手伝つて」

夕飯と風呂を済ませて居間の扇風機で火照りを冷まして居る。ザルに山盛りの赤紫蘇を抱えた母が、引き戸の木枠を器用に肩で押し開けた。今朝、畠中さんが赤紫蘇を持ってきてくれたらしい。他愛のない話をしている間も、母の手元は無駄なく動き続ける。私の倍の速さで葉を千切ってくれたおかげで、作業はあつという間に終わつた。

「今日はことりがやつてみる?」

母が底の深い鍋をコンロにのせて言う。額くと、嬉しそうに無数の皺を刻んで笑つた。シミやそばかすが散つた肌は乾燥も酷い。あまり自身のケアをする方ではなかつたし、還暦を過ぎたせいもあるだろうが、今どきの母の年齢の女性はもつと若々しい。父と離婚してのんびり暮らせているはずなのに。昔のストレスや過労のせいもあるのだろうか。

「ことり、お湯が沸いたよ」

「ああ、うん。ごめん」

「火を使つてるときにはんやりしちゃ危ないでしよう。鍋の縁、触つちや駄目よ」まるで初めて台所に立つた子供に注意を促すような口ぶりの母に、ついそつけない態度を取つてしまふ私は、まだまだ精神的に幼い。母の指示通りに鍋に赤紫蘇を入れ

る。ふさふさだつた赤紫蘇が、しなりと嵩を減らした。透明だつたお湯が、みるみる濁つたような赤茶色に染まつていく。

母がまた「火傷、気を付けてね」と念を押すのにうんざりしながら額く。ザルで濾し、葉を取り除いた汁を再び鍋に戻した。そこに砂糖——その量が文字通りの「てんこもり」で躊躇うが、「これくらい入れないと長期保存ができない」らしいので、思い切つて鍋に流し入れた。

「はい、レモン汁ね」

レモン汁の入つた小皿を受け取り、濁つた汁に回し入れると……

「わあ、綺麗」

濁つた赤茶色が、魔法をかけたみたいに鮮やかな赤色に変わつた。煮沸消毒をした瓶に移すと、それはさらに透き通つて、宝石のルビーを溶かしたみたいだつた。

完成した赤紫蘇ジュースを氷を入れたグラスに注ぎ、炭酸水で割る。居間のテーブルを挟んで母と向かい合い、小さな気泡が弾けるグラスをストローでかき混ぜた。

「ことりが帰つてきてからお母さんは毎日樂しいけど、ことりはどう? やつぱり戻りたいんじゃない?」

「そんなことないよ。まあ、戻りたくなつたら適当に戻るから」

な暮らしを壊すことにもなりかねない。

「お弁当屋さんのバイト、楽しそうだつたじゃない」

「そうかな」

「新人の男の子だつけ。あの子のことを話してると、ちょっと楽しそうだつたよ」

「口に含んでいた紫蘇ジユースが気管に入つて激しく咳き込んだ」

「やめてよね。ノリは軽いし、能天気だし、すつごい派手なんだから」

「でも、ことりからお友達の話を聞くことつてなかつたからね。愚痴ばかりだつたけど、ちょっと楽しそうな感じ。いいお友達ができたんだなつて、お母さん嬉しかつたよ」

「もう辞めたんだし、関係ないよ。ごちそうさま」

空のグラスを持つて立ち上がり、居間の引き戸を開ける。

「男の人は苦手なの。わかつてるでしょ」

冗談で言つたつもりなのに、「そつか……そうよね」と呟いた母の声は、寂しそうに聞こえた。

「ことり、料理は昔から上手だつたけど、また腕を上げたわねえ」

久々の休日となつた母が味噌汁を飲み、焼き鯖の身をほぐしながら感慨深く頷いた。

「まあ、私も一人暮らしが長いからね」

「言いながら、昨夜の残り物のきんぴらごぼうを、ごはんにのせた。昨日よりも味が馴染んだ甘辛いきんぴらごぼうは、ごはんによく合う。

「駄目なお母さんを持つと子供がしつかりするんだつて。うちは当たつてるなーと思つて笑つちやつた」

何それ、と鼻で笑つて、ごはんを一気にかき込んだ。

「お母さんは駄目じゃないでしょ」

母は駄目な母親どころか、頑張りすぎな母親だ。離婚した責任でも感じているのか、なんでも完璧にこなそうとする。私がもつと適当でいいんじやないと言つても変わらない。だからと言つて私が手伝おうとすると、些細なことにも「危ないからね」と遠ざける。

高校から島を出るときだつて、ついてこようとするのを必死で説得したのだ。そういえばあの頃、ツバキさんが母に寄り添つてくれていたから島を出られた。今頃になつてそんなことを思い出す。

片付けを済ませて居間に戻ると、母はすでに着替えを済ませ、バッグにスマホを仕舞つているところだつた。

「出かけるの？」

51 ことりの古民家ごはん

「この前、臨時集会に出られなくてね。今日もあるみたいだから行つてくる」

## 立ち読みサンプル

### はここまで